

## オオ化けのチーム13期

### 第13期 佐々木喜久男

昭和31年12月第2日曜日、天候雨、秩父宮ラグビー場、全国高校ラグビー大会東京都予選Bブロック決勝戦、千歳高対保善高(記事-A)が行われた。試合結果は、千歳高5対42保善高、で東京都代表は、保善高に決まった。

小型軽量のチームである千歳フィフティーンは、試合当日の天候が最大の関心事であったが、天は、我々の願いにもかかわらず前夜から冷たい雨を降らせていた。

試合経過は、前半こそ善戦したものの後半は、相手方の一方的な試合となり、13期生の高校ラグビーは、これで終了した。大会初戦より辛勝続きで勝ち上がって来た小型チームの我々は、どの試合にも全力を出し切った思いが年を経る程強くなっている。

準決勝で勝ったあとは、次の対保善高戦をどの様に戦うかで頭が一杯であった。その結果、決勝戦迄の練習は、ディフェンスに重点を置いた練習に徹することとし非常に厳しい一週間を過ごした。チーム内からは、疑念、批判が出た程であり、それを承知でチームをまとめて行かなければならない主将としての苦しさは、40年後の今も時々脳裏を掠める。

この一年間でのチームの成長の仕方、変り方は、非常に顕著のものがあつた。4月の結成時から、春の大会時迄は、このチームが冬には全国大会予選の最後まで残るとは、小生はもちろん、指導されていた諸先輩達も考えられなかったと思う。変り方の原因は、一つには夏合宿、もう一つは明大八幡山グラウンドでの練習にあつた。

合宿では、千歳高初めての立教高との合同合宿が仙石原で行われた。実力が同程度の二チームが、競争心をあおり、毎日練習のあと行う試合を日々を乗り切ったが、がんばりが自信となったものと思っている。9月に入ってからチームの状態は、春とはまったく違うチームとなっていた。また合宿後の八幡山での練習では、大学生、あるいは高校チームとの練習をかさねて、チームにゲームの速さが加わって来た事によるものである。

なお合同合宿をした立教高も東京予選Aブロック決勝で城北高に敗退したのは何かの因縁か？

13期の仲間、岩本俊彦(FW)、菊地一雄(FW)、国井陽一(CTB)、中城嘉昭(HB)、吉村肇(WTB)、森田立男(FB)、佐々木喜久男(SO)は、3年生の一年間東京での最後の公式戦迄出場出来た事は各人共強く心に残っていると確信している。仲間のうち定時制に籍を置き、仕事が終わってから練習に励んでいた吉村のがんばりは印象深い。また早くも鬼籍に入った森田の冥福を祈るものである。

最後ながら、我々13期に良い思い出を残してくれた、14、15期の下級生に感謝するものである。

[全国高校ラグビー大会東京都予選Bブロックの試合結果]  
(記事-B)

1回戦	千歳高	22	—	0	戸山高
2回戦	千歳高	3	—	0	大森高
準決勝	千歳高	14	—	8	田園調布高
決勝戦	千歳高	5	—	42	保善高

# 保善と善闘して敗ける

ラグビー班

昭和三十一年十二月、全国高校ラグビー大会東京都予選Bブロック決勝が青山秩父宮グラウンドで本校対保善との間で行われた。本校は健闘に健闘を重ね、前年団体より一年半ぶりの東京予選決勝進出が実現した。千歳ラグビー部の黄金時代（二十四年—二十六年）からみれば劣りはしても、近年にない充実さをおびている。試合の結果は41対0と大きく差をつけられ健闘及ばず大敗はしたが、前半は足にまかせての奮闘と、チームワークが身体を助け五分に闘った。だが後半に入るや、精神力で闘っていた本校は、体力の差はいかにもできず、全国大会進出の夢は無情にも敗られた。

保善	48	T	10	P	0	G	41
千歳	00	G	10	G	0	計	7
						反	
F・W		H・B		T・R		F・B	

利栄本岡田土本谷木城田地部村田  
毛真岩平永川山亀佐中生瀬阿吉森  
タッチジャツヂ 小笠原

〈記事-A 昭和32年2月18日付 千歳新聞〉

# 準決勝に進出!!

全国大会都予選に

ラグビー

全国高校ラグビー大会都予選は十一月十八日より成城、八幡山両グラウンドに於いて行なわれた。本校は一回戦戸山高校、二回戦大森高と対戦し、健闘よきこれを破り準決勝に進出した。

一回戦 於成城学園グラウンド  
千歳22(14-0)0戸山

二回戦 於成城学園グラウンド  
千歳3(3-0)0大森

グラウンドコンディション悪くSO佐々木の欠場を伴い千歳苦戦を予想された。キックオフ直後から千歳ゴール前に釘づけされ、前線に不安を持たせたが敵の反則及び味方バックスの好タックルでははみ0対0のまま勝負を後半に持ち込んだ。後半に入るや、千歳奮起

し個々の突込み及び適時にバックパスにボールを回し、十五分頃敵ラインの乱れに乗りFB森田がラインに入り右中間にトライしこれが四軍を通じて唯一の得点となった。其の後も再三のピンチを納めたが敵の拙攻で流れタイムアップになった。これで本校は準決勝に進出し田園布高と対戦しこれに勝てば久々に決勝へ進出機多の先輩が涙をのんだ宿敵保善高校と対戦する。勝算薄しと云えども古豪千歳の名にかけて、全国連日の猛練習を続けている。

〈記事-B 昭和31年12月3日付 千歳新聞〉

## （ 第 13 期 同期生からのことば ）

この年に成ってふと考えた。もし千歳でラグビーとの出会いがなかったら今日の自分はないと言い切れる程大きな影響を受け継いで今日に至っています。CRCの同期生OB諸兄後輩諸君との付き合いを大切にしてCRCの永遠の存在発展を見守って行きたいと思っています。

菊地一雄

秩父宮、それは高校ラグビーが一度はプレーをしたいラグビー場です。昭和31年12月部予選Bブロックの決勝戦、相手は強豪保善（本大会で全国制覇）。武者震いの中、キックオフの笛、あの緊張感は今でも忘れられません。結果は大敗でしたが未だに青春の一ページとして強烈な印象が残っています。

中城嘉昭

一年で準決勝、二年で準々決勝、三年で決勝と全国大会には今一步及ばなかったが、楽しくかつ厳しい三年間をすごすことが出来た。チームワークの大切さとフォア・ザ・チームの心は今も生きつづけている。

岩本俊彦

地獄の夏合宿で先輩が“練習時には自分が一番下手で、試合時には一番上手いと思え”と言われた事が、今でも忘れられない。

国井陽一

### 外から見た私のラグビー

私がラグビーの洗礼を受けたのは高校二年の時、岩本や柏谷先輩の影響で仲間三人で練習に加わったのですが最後迄残ったのは中城だけでした。短い期間でしたが好きな仲間と汗を流せて幸せでした。練習で大きなビフテキが出来た事、シャワー場が満員で教室の前の水呑み場でフルチンに成って体を洗った事、腹が空いて糸を引く返品用の菓子パンを半額で食べた事、楽しい思い出ばかりです。特に在校生の授業中、校庭に唯一人ゴールの練習をしていた故・片倉先輩の姿は脳裏から消えません。越境入学したラグビーの申し子・佐々木主将。受験勉強を犠牲にした岩本副将。この二人の苦勞が見事に花が咲き秩父宮ラグビー場で強敵保善と決勝戦を行いました。残念乍ら花園には行けませんでした。千歳の分まで頑張った保善は全国優勝を成しとげたのです。今は知りませんが、ラグビーのメッカと言われた秩父宮でプレー出来た彼等は生涯の思い出に成り、私の一生の悔いとして残っているのです。

佐伯和思